

外国語学習の最初の段階について

阿 部 卓 也

この論考はあまり周到なものとは言えない。¹⁾ 外国語教育を考える上での、私なりの方向付けのために書いている。だが、方向が決まれば、あとは方法の練り上げと、参加への誘惑・説得だけである。

必要なことは何か？——「教え方」と「学び方」の関係について

外国語の教授法（応用言語学？）に関して著わされた著作や論文は数多い。また英語の学習法についての書物も枚挙にいとまがない。だが外国語の学習をめぐるのは、なお大きな穴が存在するように思える。一言でいえば、**学ぶ立場から、初めての外国語を一定の期間である程度の力をつけるまで習得することができるような学習法に関する案内**である。皆無というわけではないが、²⁾ 先に挙げたようなジャンルにくらべて、そうした言説の流通はあまりに貧弱であるように思われる。

問題は学習法である。外国語の教師ならそれぞれに外国語学習の方法を持っ

-
- 1) 本稿が「商学」論究に掲載されているものか、そもそも「論究」と呼べるのか、筆者には確信がない。そのことに変わりはないが、本学商学部の福井幸男教授のいくつかの教育的なお仕事に鼓舞されるところがあったことは記して感謝しておきたい。
 - 2) 一般向けの書物としては、たとえば 佐伯智義『科学的な外国語学習法』講談社 1992、鈴木崇生『脳のメカニズムからみた英会話習得法』三一書房 1992、Vera F. Birkenbihl, Die Birkenbihl-Methode Fremdsprachen zu lernen, 4. Aufl. München 1990などが評価できる。私自身もこれらの書物からさまざまな示唆を受けている。How to ものと馬鹿にしてはならない。ここで問題にしているのはまさにその How to の欠落なのだから。

ているのだろうが、ある種の遠慮や羞恥からか、そうしたことを語ってくれる人は決して多くない。この種の発言は、発言者自身の外国語能力を担保として要求するものなのだろう。わが身を省みて、お寒いかぎりのものでしかないことを認めざるを得ない。³⁾ だが私はここで羞恥を捨てて蛮勇をふるう。以下で私が述べようとするのは言ってみれば当たり前のことばかりである。だがそういうことをとりあえずまとめてみるのが、現状では、あるいは現状でも、いくらからでも意義をもっているように思えてならない。

一つ注意すべきは、仕事として何十年も続けていれば、誰であれ、どんなやり方であれ、ある程度は身に付いてくるのは当然だということである。問題は、そうした場合、教えるには欠かせないはずの「学習法」に関する反省が欠落してしまう危険があるということだ。ドイツ語／フランス語の教師ならば、英語はもとよりフランス語／ドイツ語（別に他の言語でも一向に構わない）くらいはひととおりで学んでいることと思われるが、私は、外国語の教師は「専門」の言語とは別の言語を学んでみる必要があると考える。もちろん、自分の母国語を教えている場合にはこの点さらに用心しなければならない。

学ぶ側の多くは教える側と同じ仕事を選ぶわけではない。先に「ある程度の力」と言った。それがどの程度の力なのか規定することは不可欠でありながら簡単ではないが、学習者が望むのは、とりあえず1年なり2年なりの期間で何らか実用に耐える力を付けることであろうことは疑いない。⁴⁾ 教師が十何年かかったのだからといって、生徒にも同じことを要求することはない。彼らには、

3) というような言い方は、ここではまぎれもない事実であるものの、「外国語学習」について何か言われるときの定型表現でもある。こうした謙譲や卑下は、ときとして保身や韜晦にすぎないこともあり、これから外国語を学ぼうという人たちに対する発言としては、必ずしも美德とは言えない。たとえば安原顕編『私の外国語上達法』（岩波書店1994）のなかで、三島憲一は自身の韓国語学習の失敗談を述べて、上達の秘訣はない、と断言しているが、誰が氏から韓国語の話など聞きたいと思うだろうか。学習者が巧みなドイツ語使いとしての氏に聞きたいのはドイツ語の話のほずである。教師としての発言は、学習を使嘆するようなものであるべきではないだろうか？

4) 「実用に耐える」などというのも相変わらず曖昧な表現だが、ここではご容赦いただきたい。私の描くヴィジョンがいかなるものであるか（どの程度のものに過ぎないか）は、以下の行論のなかでおいおい明らかになっていくものと思う。

われわれがした回り道をせずに、余った時間はもっと別のことに注いでほしい。ここでは今なお合理性への意志、方法への意志が尊重されなければならない。

繰り返すが、まず必要なのは教授法ではなく、学習法である。教授法に関する論文、書物は数多い。それぞれに紹介されているテクニックは有益ではあるものの、多くは習得する視点、習得する側の視点が欠けており、悪く言えば授業の時間をどう埋めるか、どういうエンタテインメントを提供するかでしかないものに堕していることがままある。教授法は、まず「学び方」を考えた上で、それをサポートするようなものとして構想されなければならない。そして場合によっては「学び方」を「教える」必要がある。

外国語ができるとはどういうことか／日本で外国語を学習するということ

「学び方」を考えるには、しかし、さらにその前に検討すべき課題がある。つまり、まず、外国語ができる、とはどういうことかを考えてみなければならない。これも当たり前のことだが、達成状態を描いて、しかるにそうなるにはどうしたらよいか、というのが学び方になるはずである。

言葉は聞かれるものであり、語られるものであり、読まれるものであり、書かれるものである。これも今さら言うまでもないことだ。だが、聞かれ、語られ、読まれ、書かれるのはどのような状況においてか。まず重要なことは、どの言語も（ここではとりあえず古典語は除く）、われわれが日常、日本語を使って生活しているように、それぞれの言語圏の生活の中で当たり前に使われている、ということだ。当然のことでありながら、この認識は重要である。

問題の一つは、こういう認識が、学生にとっては相変わらず困難であるらしいことだ。いくら国際的な人の移動が盛んになったとは言え、やはり島国である。たとえばヨーロッパに着飾ってパック旅行に行く人たちには、そこで当たり前前に生活している人々がいるのであって、そこが当たり前の生活の場だという感覚が欠落している。そして学生たちにとって、彼らが学習する外国語も、

それを使って当たり前前に生活している人々がいる、ということがなかなか想像しがたいかに見える。彼らにとって、外国語はもっぱら試験のために、あるいは試験として、存在しているかのようだ。

言葉というものがどのように存在し、どのように使われているか、あるいはどのように生きられているかを掴まなくては、言葉ができるとはどういうことかも思い描きようがない。しかしこれは大変重要な出発点である。われわれの生活の中の、日本語のようなあり方が、とりあえずはことばというもののあり方であると言っておこう。⁵⁾ これは実際に日本の外に出てみればすぐに分かることでありながら、そういう機会がなければ想像が難しいものであることを、私は自分の経験から知っている。そして今でも、学生のすべてが気軽に国外に出られる訳ではない。しかしそういう機会はいずれ必ずある。そしてそのときのための外国語学習でもある。⁶⁾ だとすれば強引に想像してもらわなければならない。外国語というのは、それぞれの言語圏の人々にとって、われわれの日本語のようなものだと言うことを。そういう使われ方をしているのがそれぞれの言語だ。そういう使い方をしている人たちが、その言葉が「できる」人たちだ(「いいかい、君たちが普段日本語をつかってどうってことないおしゃべりをしているように、連中もまたこの言葉を使っているわけだ」)。そう考えれば言葉が「できる」ということはどういうことか理解できるだろう。「できる」のがどういうことか分かったなら、そういう状態になるにはどうしたらいいか、それを考えることがそのまま「学習法」になる。

5) ここでは異文化接触によるさまざまな葛藤の問題には触れない。ここで述べるのは、それ以前の問題であり、またここで述べるようなことを欠いてはそのような問題の論議もむなし。

6) このあたりの目標設定は、おそらく本稿の議論の最も弱い点である。外国語なんて、～～できさえすればいいのだ、という後ろ向きの議論はどこにでもあり、かつ強力である。こうした議論に正面から対することを私はここで避ける。これも行論のなかで全体として説得し、誘惑できることを期待したい。授業のなかでモチベーションまで与えてやるのはきわめて難しい。少なくとも、モチベーションのある学習者(大学の新生の大部分は外国語学習への高い意欲を持っている)に対しては、上手に助けてやる方法を考えたい。目的について言えば、私自身は、自由であるために外国語を学ぶのだと思っている。

「発信型」の外国語学習？

「発信型」の外国語学習ということがよく言われる。これはそれ自体大切なことに違いない。特にもっぱらテキスト読解を中心にしていたかつてのやり方に対しては、それだけでアンチテーゼとしての意義があったことだろう。本稿も、外国語学習が「発信」に結び付くべきことを当然の前提としている。しかし「発信型」と銘打った教授法の現況はどうか。学習者に発話させることそれ自体はいいとしても、蓄積の局面を欠くために、せいぜい「あなたのお名前はなんと言いますか？」「私は～～と申します」「どこにお住まいですか」「私は～～に住んでいます。」あたりが精いっぱい、その先ろくな「会話」にならない。入れていなければ出せないのが道理である。⁷⁾ところが「発信型」と銘打った教授法は時にそのあたりの考慮が奇妙に欠落していることがあるようだ。(繰り返すが、これももちろんすべてがそうであるわけではない。)さらに、出せないだけでなく聴く訓練が欠けているために何とかおぼつかない手つきの発信はできてもほとんど「受信」ができない。つまりここでもステップが一つ欠落している。必要なことは、発信するために蓄積すること、発信することを念頭に置いて蓄積することである。繰り返しになるが、ある程度まとまった——かつまた発信を念頭に置いた——蓄積がなければ、発信は不可能である。(もちろんこれは時間的に厳密な先後関係ではない。蓄積の局面と発信の練習は並行して行われてよい。)すると問題は、発信に結び付く蓄積をいかに行うかということになる。

7) ネイティブ・スピーカーの教師をあてがいさえすればいいわけではないということも、ここに理由がある。ネイティブ・スピーカーはいてくれてしかるべきだ。だがたとえば外国語はネイティブ・スピーカーが教えることが通例になっているドイツの大学(ボン大学で初学者用のフランス語とスペイン語を履修した経験だけから言うのだが)でも、日本に比べて必ずしも高い成果を上げているようには見えない。これは学生がやはりここで問題にしているようなステップを理解していないからである。

では「学び方」について：覚えること←言えること←聞けること

では発信に結び付く蓄積のためにはどのようなことが必要か。いま蓄積の重要性を指摘したが、しかし覚えるよりもまず先に「言える」ことが必要であり、そしてさらにそれに先立って、聴くこと、「聞ける」ことが重要である。ここでの眼目は「言える」ことにあるのだが、順を追って述べていこう。

●聴く

文字は音を表さない。聴かなければ音は分からない。文字に音を見いだすことができるのは、既に音を知っている者だけである。ここではいわば「音声中心主義」こそ主張されるべきである。音読も、やらないよりはやったほうがましだが、音読よりは、聴いてまねるほうが望ましい。文字の「読み方」を習って、文字から音声を合成するのは限界がある。(学生の多くに共通する欠点の一つは、すべていわばカタカナで、つまり日本語の音声に置き換えて発音するということである。)⁸⁾ 2~30年前とは比較にならないほど音声素材の利用が容易になった今日でも、この点、まだ意識のズレがあるように思われる。「ヒアリング」(こんな「分野」がそもそも別建てになっていることがおかしいのだが)が「上級」の「オプション」などであっては困るのだ。一生懸命文字を見て覚えて、しかるのちにおまけで「ヒアリング」もやるというのではなく、はじめから耳から覚えればいいのである。(私は授業中、耳から入れて口から出せと言い、そういう練習をさせることが多い。)

音声の指導ということで、まず出てくるのがLL教室かもしれない。LL教室というのも使い方次第では有益だが、私はLL教室を使えとは主張しない。む

8) 私は奇妙で鮮やかな経験をしたことがある。ネイティブスピーカーによる大学1年生に対する「ドイツ語会話」の初回の授業を参観させてもらったのだが、講師がはじめのうち一切文字を使わず、口移して練習させていた間、学生たちの発音は意外なほど見事なものだった。だが、その時間の最後になって、講師が自分の名前を黒板に書いて見せたたん、それを読む学生たちの発音は鮮やかな「カタカナ」の、つまり日本語の発音に変わったのである。この場を借りて畏友 Carolin Funck に感謝する。

しろ LL 教室とは、個人がテープレコーダーなどを入手するのもまだ比較的困難だった時代の歴史的産物だと考えている。⁹⁾ その後のテープレコーダー、カセットレコーダー、ラジカセ、ヘッドフォンステレオの普及はめざましい。CD プレイヤーも今日ではほぼ標準的な家電の一つとなり、今後は DAT や MD が使われるようになっていくだろう。¹⁰⁾ そうした音声再生装置の外国語学習への利用のためのノウハウは、しかしまだ十分に蓄積されていないように思われる。週に一回一時間程度 LL 教室に行ったところで、効果はあまりに限定されている。誰もが持っている再生装置を個人的に使って、**もっと多く、もっと強度に、もっと気楽に聴く**ことが必要である。聞き取りは慣れの問題が大きい。気楽に繰り返し聴くことがなにより必要であり、そしてそれは現在の種々のオーディオ機器を活用すれば簡単なことである。

なぜ発音を重視するのか。それぞれの言語の発声メカニズムやリズムというものがあり、文の構造などとも密接に関連している。したがってドイツ語はドイツ語の発音による方が発声、発話しやすい。また理解されやすいことも言うまでもない。せっきやく語彙的にも、文法的にも正しい文を発話していながら、発音上の難点のために理解されず、聞き返され、意気阻喪してしまうことほど馬鹿馬鹿しいことがあるか。ありがたいことに「日本人的な」発音に馴れて

-
- 9) もちろん LL 教室は便利な点が多い。音声教材を学習者の人数分すぐに作ることができる。学習者に対して、音声教材の活用のしかたをその場で示してやることができる。だが、LL 教室を使うのはいいとして、その週 1 回以外に学習者たちが十分聴くことができるよう、一人一人への音声教材の配布がなされないならば、現状ではどこか本末を違えていると言うべきだろう。ちなみに、「パソコン教室」は現時点で十分な必要性を持っている。いずれパソコンがさらに普及していけば、LL 教室と同じ運命をたどるはずだが…。いずれにせよ、オーディオ装置やパソコンが個人レベルで普及した後にも、むしろそのあとに必要となってくるのがソフトの配分、配布であり、その「使い方」を教えることである。
- 10) 語学教科書・参考書出版社には音声付録（これが付録にすぎないという認識がまず問題なのだが）を、最近ではきわめて廉価でもある CD にシフトするよう促しておきたい。何人も登場するダイアログを、一人何役もかねて、しかも台本棒読みでテープを作るのもやめていただきたい。個人用の装置としては、MD が今後もっとも有望だろう。カセットは耐久性や、一部分を繰り返してかけっぱなしにする機能などの点で、あきらかに CD・MD に劣る。もともとの LL の売り物だった複数トラックで自分の声を録音して手本と比較するという機能はあまり重要ではない。

くれているネイティブスピーカーにも要注意である。彼らは分かってくれても、普通の大部分の人々は分かってくれない、というケースもあり得る。

●言う

そして肝心なことが「言う」練習である。まだ「自分の考えを言う」などという「発信型」論が耳障りよく述べるような段階の問題ではない。暗記でもない。単純に、一連の文を適切な発音で滑らかに言えるようにするというだけのことだ。そう、これも昔から言われていることである。しかしどうも忘れられがちなのではないか。あるいはポイントがずれてとらえられているのではないか。発音とは要するに発声器官を適切に滑らかに使えるようにすることなのであって、肉体的なスキルの問題、スポーツや楽器演奏の練習と同じことである。ことに日本語は口の回りの筋肉を使わない言語なので、そうではない多くの外国語を習得するにはこうしたトレーニングが大切になる。ドイツ人の口元の筋肉が発達していることは、彼等の顔を見れば分かる。英語でもフランス語でも多かれ少なかれそうである。スペイン語は日本語同様口元をあまり酷使しないので、スペイン語圏の人たちもそのほわっとした口元を見ただけである程度ドイツ人などから判別できるくらいだ（スペイン語はそのかわり舌を酷使する）。発声の仕方については適宜教師はアドバイスすべきだが、¹¹⁾ 基本はあくまでも聴いてまねることである。当然ながら問題は個々の音の発音だけではない。リズム、イントネーション、アクセント、メロディ、表情、すべてに注意を払うべきである。1課のダイアログの長さが3分程度の、ある程度まとまった量の

11) ドイツ語で特に注意すべき発音をいくつか挙げておく。まず [n] の発音。日本語の「ん」になっていないか？ ちゃんと舌先は口蓋に付いているか？ われわれにとって聴き分けることは難しくても意識して発音し分けることはそれほど難しくなはいはずである。逆にわれわれにとってちがいが感じられなくても彼ら（ドイツ語話者たち）にとっては理解が困難になる。次に [o], [u] などの発音。多くの参考書に見られる「唇を突き出す」という記述はミスリーディングである。単に口をすぼめて、舌を少し引くこと。愚直に口を突き出しては、これらの発音は不可能になる。以上は英仏語などでも基本的には共通する。[n] ができていなければそれとの差異が重要な鼻母音も生きてこない。

教材を用意する。実際にありうべき発話からなり、できるだけ演出の丁寧な音声素材が付いていることがもちろん前提である。そしてそれを聴いて、ただちに繰り返すこと。さらに進んで、音声教材に重ねるように同時に発音すること。このやり方を shadowing と呼ぶそうである。¹²⁾ 自分の発音が安定してきたら、聞かなくても、読んでただちに（文字から眼を離して）言ってみるという方法（一種の「音読」）も効果を持つ。

●覚える

ここで言っているのはさしあたりは「暗唱」ではない。文字列や単語を覚えることが主目的ではないのだ。それ以前に必要なことなのである。だが覚えることと無関係なのでもない。覚えることを目的とするわけではないが、結果として覚えてしまうのだ。「言う」練習という意識を欠いてひたすら暗記しようとするのはかえって労力がかかる。この練習は「筋肉トレーニング」としての面の他には、とりあえずはいわゆる「短期記憶」だけのトレーニングである。

覚えることは絶対に欠かせない。先に述べたように、蓄積は不可欠である。「暗記反対」などの旗を振り、覚えることを抜きにして学習が成り立つかのような言説が一部に流通しているのは遺憾と言うほかない。その一方で、多くの学習者たちはむやみに「覚え込もう」としてむなしい労力を費やしている。つまり、まず「言え」なければ覚えるのは難しいし、覚えても言えなければ「使えない」という認識が欠けているのである。

まずはその場で反復できればよい。聴いてすぐに繰り返して言ってみる。読んですぐに文字から眼を離して言ってみる。即座に繰り返すだけのことだが、これはいわゆる「短期記憶」のトレーニングになっている。これができなければ「長期記憶」への保存は難しいし、これを繰り返していれば自然に「長期記

12) shadowing という方法は、私は自分なりに見いだして実行していたが、その後、松尾式之『国際交流 SPEAKING』筑摩書房1988によってこのように呼ばれていること、同時通訳のトレーニング法として古くから用いられていることを知った。別にそんな専門職に独占させることもない、単純で有益な方法である。もっと一般化してよい。

憶」に保存される。教室で学生にやらせる場合は発音上のアドバイスをするほか、たいていの学生はまず天井をにらみながら単語ごとのぶつ切りでぼつりぼつりと発音するので、ちゃんと前を向いて、一つのフレーズとして滑らかに言えるまで繰り返させる。「きのうコンパに来ればよかったのに」¹³⁾なんて台詞は日本語で考えたら実によく使いそうでかつ馬鹿みたいに単純な台詞だろう？それがすらすら言えなくて会話もくそもないぜ、と言うと学生は納得する。)もちろん授業時間だけでは効果は限られるので、普段からこういう練習をするように、とつけ加える。

こうした練習を上にも述べたような音声教材をつかって気楽に繰り返すことによって、また必ずしも発音しなくても繰り返し聞くことによって、フレーズごと、コンテキストごと、いつのまにか「覚える」ことができる。¹⁴⁾もちろん、その際文法的な分析の視点があったほうがよいので、しかしそれは現状の「文法」の授業でもかなりカバーできるから、それについてはいまは触れない。そしてこのようにしてある程度の量の実際にありうべき発話を蓄積したなら、あとはさまざまな変形、置き換えによっていくらでも「使う」ことができる。単語を単語として覚え、増やしていくのも有益になる。¹⁵⁾ またこの段階で、たとえばチョムスキーの形而上学も構造主義言語学も意味を持つてくるのである。

13) ちなみにこの表現はドイツ語では話法の助動詞の接続法2式過去になるが、きわめて実用性の高い(つまりわれわれが普段よく口にしそうな、という意味である)この表現は、多くの学習者用参考書で無視されている。「高級」すぎるということらしい。本稿では教授用の文法体系については問題にしない(時間数制約などから言って、文法の教授体系については現状でもかなりよくできていると思う)が、学習者が言いたいこと(しかもごく平凡な)が言えるというのは大切なことではないだろうか？

14) LL教室については先に触れたが、通常の教室で、教師がカセットレコーダーを持ち込んで、週に一度の授業のなかでわずかな時間、音を流して聴かせるというのは、少し考えてみれば分かることだが、一番効果がない。聴くためには繰り返しによる慣れが必要なのに、これだけでは学習者はとうてい慣れることはできない。苦手意識を植え付けるだけである。それに限られた授業時間にはほかにいくらでもやることがあるはずだ。

15) 文の蓄積を欠いたままいきなり単語暗記に走るのも日本の学生に多く見られる習性である。ある程度の文の蓄積をしたあとでなら、個々に単語を増やしていくことも意味を持つし、なにより容易になっているはずである。

そして教えるということ

十分に意をつくしたとは言いがたいものの、およそ上に述べたようなところが、私の言う「学習法」の（現況において強調されるべきだと思われる）大筋である。ではそれをサポートするような授業とはどんなものになるか。これはさまざまな制度上の制約とのかねあいもあり、私も必ずしも明快な道筋を見いだしているわけではない。忸怩たるものがあるが、この点、まずお断りしておかなければならない。

まず1. 適切な教材を選び、学習者たちが容易に入手できるよう手配してやらなければならない。それから問題になるのが、2. 上に書いてきたような「学び方」を教えるということである。これは必ずしも容易ではない。聴いて言うという練習をあたりまえの習慣として身につけてもらわなければならない。これにはモチベーションの問題がある。この点については、まずは意欲のある者に道筋を示してやることができればいい、としておこう。もちろん3. 文の構造の分析のための文法的な知識の解説はある程度与える必要がある。これは現行の「文法」の授業でかなりのところカバーすることができる。

ここに述べたような仕方で学習者が着実に蓄積をしてくれるならば、週に1度の授業での応答練習だのロールプレイング練習だの近來さまざまに工夫されている授業方法もはじめて意味を持ってくる。いわゆるネイティブ・スピーカーによる授業も有意義になってくる。本来の意味での「発信型」の学習につなげていくこともできるようになるだろう。このステップは、どうしても埋めていかなければならない。あとはどうにでも視界は開ける。

おわりに

もちろん、外国語ができるということが国際化ではない。ここでは「国際化」など問題にしているのではない。（実は「国際化」という日本語の単語が意味するところを私は知らない。）もちろんそれは外国語を避ける理由にはならない。（そういう議論もよく見かける。外国語ができることが国際化ではない。めざす

べきは国際化である。ゆえに外国語を学ぶ必要はない。なんという倒錯した議論だろう。) 外国語「会話」学校の繁盛ぶりも、奇妙な英語日本語の混成言語を話す DJ の横行も、まともな外国語学習を考える妨げにはならない。そうしたものは、逆に外国語を使うことが当たり前になってくれば消えて行くはずである。(二三の) 外国語を身につけることをできるだけ多くの人にとってあたりまえのことにすること。ちょっと遠大に見えるかもしれないが、目指すべき方向はそれ以外にはない。

(筆者は関西学院大学商学部専任講師)